
MASKED RIDER KABUTO episode X

高浜ゆりえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MASKED RIDER KABUTO episode

X

【Zコード】

N 8 2 7 4 A

【作者名】

高浜ゆりえ

【あらすじ】

この作品は2007年に放送され、現在も熱狂的なファンの支持を得ている特撮ヒーロー番組【仮面ライダークバト】のファンフィクション作品です。因みに、俺様だけでなく、俺、も参上します。

プロローグ（前書き）

【 episode X

大地の霸道】

プロローグ

七年前、日本・渋谷に隕石が落下し周囲は崩壊した。

そして今、日本は正体不明の怪物^{ワーム}によつて混乱の中にある。

これはそのワームと戦い、ワームと人間に隠された真実を探す仮面ライダー達の戦いの断片である。

プロローグ（後書き）

短いですが、原作のキャラクター達のイメージを壊さないよう頑張りたいと思います。

episode 1 (前書き)

episode 1

加賀見つて副主人公だったの？

「……やつたやつたぞ俺は俺はやつと時代に追いついたア！」

加賀美 新

仮面ライダー『ガタック』に変身し、そのパワーでワームを圧倒して最近ノリノリ（死語）の男であり、仮面ライダーカブトの副主人公のような存在である……

「いや、時代が俺に追いついたんだ！よつしゃー！」
……と、作者は思っている。

「戦う俺は美しいイイイイイイイイ！ああああアアアアつ 加賀美戦隊
ツ！」

トンネル内の激しい戦闘が終了し、仮面ライダーガタックの変身が解除された加賀見は、ガツッポーズをとりながら謎の替え歌を歌い、普通の人を見たら引くくらい完全に浮かれていた。

「……相変わらずおめでたい奴だな」

雨水が滴り落ちるトンネル内に乾いた声が響く、その声の主は（天

の道を行き、総てを司る男）…天道総司である。

「てつ 天道！？遅かつたじやないか、ワームならもう俺が倒したぞ？」

加賀見は天道を見つめながらバイクに掛けおいた黄色い服（CMで着てるやつ）を羽織り、不安そうな顔をした。

「…そうちか」

天道はサラッと言い、加賀見に背を向けた。

「どうしたんだ天道？最近…ワームが出てもすぐに駆けつけなくなつたじやないか？」

…確かに最近はワームが現れてもすぐに現れなくなつた。その点は少し鈍感な加賀見でも流石に不思議に思つていた。

「……」

図星であつた、天道は意外に敏感になつた加賀見に少し驚きながら振り返り、静かに口を開いた。

「……ワームを倒すことが…俺の全てじゃないからな」

天道の言葉は湿つたトンネル内に響き、加賀見は驚いた。

「……ワームを倒すことだが……お前の全てじゃない？」

加賀見は天道の言葉を口にして驚く。

何故なら天道は最初の戦いの際に

「」の一瞬のために生きてきた

のようなニアーアンスの言葉を言つていたからである。

「天道…お前 どうしたんだ? ワームを倒さないと 人間は滅ぼされてしまうかも知れないんだぞ!」

加賀見は珍しく天道に詰め寄り叱責する、その叫びと詰め寄る音がトンネル内に響いた。

「…分かっている…」

天道、それはまるで天に輝く太陽のように総てを照らす男だ、しかし最近の彼は少し調子が悪いようである… そのことは天道自信も分かつてはいたのだ

「…少し前の話だ…」

天道は加賀見との視線を逸らしてトンネルの外を見つめる。

「…」

先ほどから降つている雨は更に激しくなり、天道は瞳を細めて語り始めた…

大地の霸道を極めし者の話を…

episode
1
(後書き)

多分、副主人公かと。

episode 2 (前書き)

episode 2

天の道を行き、全てを司る。

2ヶ月前

雨が降っていた…

その日は苔が生えたトンネルの中で一台の車がコンクリートの壁に衝突していた…

要するに、交通事故である。

「……うう……ぐう」

車の中で運転をしていた人間が呻き声をあげながらその鉄の塊から這い出ようと/orしてみると、その車の近くに小さな人影が現れた。

「大丈夫か？」

聞き慣れた声であった、男は途切れそうな意識の中での声の主に呼びかけた。

「た……たつ……たつ！助けて……助けてくれえっ！」

必死の呼びかける男、鉄の塊からは、その男の手が這い出ていた。

「もうお前は死なんだ、それくらいはいいだろ?」

人影は腕を横に振り車の残骸に衝撃波を放ち、その鉄の塊を粉碎した。

「なつ？！なんだつ？！」

男は粉々に砕けていく車から解放され、アスファルトの大地に落下した。

「俺がつ……死ぬ……？！」

男は瞳を開いて人影の放った言葉を反復する、混乱していた視覚は蘇り、その視界には肌色の人影が映し出された。

「よつ、俺」

人影は顎鬚が生えた、黒いスーツ姿の男であった。火のついた煙草を左手から離し、靴で踏みつぶした。

「……お前は……俺？！」

床でのけぞる男は、ボロボロになつた黒いスーツと、自分を助けた者の姿を交互に見つめて驚愕した

「……」

自分と全く同じ姿の人間がそこにいたのだ。

「アホな台詞だな、罰として……すぐ死ね！」

自分を助けた男は残酷な笑みを浮かべると、その肌はドロドロと溶け出し、その中から緑色の異形の化け物（ワーム）が現れた。

『ギギギギッ！』

ワームの低く、奇怪な声がトンネル内に響く。

男は戦慄し、力無く大地に伏した。

「ひいいつ！」

ワームの右腕の細長い先端が、すっかり青ざめた男の頬に触れる。
『ギギッ…！』

頬からはついすりと赤い血が流れ…その男は瞳を閉じて絶望する。

「お婆ちゃんが言つていた…人は誰でも一つの太陽」

落ち着いた声がトンネル内に響く、同時に男の頬に触れていたワームの腕が一瞬にして吹き飛んだ。

「その輝きを消せるものなど…ない」

『ギギギギッ？！』

ワームは、トンネルに穴を穿ち自分の腕を切り裂いたその赤い飛行体を目で追つた。

「……だつ……だ……誰……だ？」

男は大地に伏しながら顔をあげ、声の聞こえたトンネルの入り口の方向を見つめた。

そこには、一人の青年が眩しい陽光を背に浴びて立っていた。

「…天の道を行き…総てを司る男…」

青年は空中を素早く機動する赤い物体を手で掴み、腰のベルトへと装着させて静かに叫んだ。

「変身！」

閃光がトンネル内を照らし、その後に機械音が響く。「ヘンシン！？」

その光は冷たく輝いていたが、死の恐怖に包まれていた男には、一片の悪意も無いようにも感じられた。

episode 2 (後書き)

淡々と話す天道の顔を見て、加賀美は不安に思っていた。

(もしかして……

…この話は…ただの武勇伝か?)

加賀美の予想はハズレである、なぜなら…

**episode
3 (前書き)**

強きもの
episode
3

『ギギギギイツ！』

「ただのワームでも 全力で倒す」

天道総司は鎧のような銀の装甲を纏つた戦士・仮面ライダー・カブトに変身し、奇怪な声をあげて両腕を構えるワームに向かって走り出した。

(一気に終わらせるー)

専用武器であるカブトクナイガンを手斧のような形態に変形させ、アックスモードワームに切りかかった。

『ギギツ！』

ワームの緑色のボディにカブトクナイガンの斧のような刃がめり込み、鮮血がカブトの銀の鎧を染めた。

「キヤストオフ！」

カブトがベルトに装着されたカブトゼクターを操作すると、全身を包む鎧のロックが外れ、機械音が響いた。

「キャスト オフ！！」

機械音と共にカブトの全身から銀色の装甲が弾け飛び、その無数の装甲は迫り来るワームに直撃した。

『…ギギッ…ギギギギッ ガツ ガツ…！』

装甲に直撃して吹き飛ばされた血だらけのワームは、右腕を失いながらも断末魔にも似た叫びをあげた。

「とビめだ

「ワン・ツー・スリー！」

ベルトに装備されているカブトゼクターの三つの上部ボタンを押すと小気味よく機械音が響き、カブトは血だらけのワームに向かって走り出した。

「ライダー キック！」

ベルトから発生した凄まじいエネルギーは脚部に収束し、カブトの回し蹴りがワームに炸裂した……

ようになにカブト…天道総司には見えた。

『…………と、芝居はここまでいいかな？天道きゅん』

ワームは死んではいなかつた それどころか そのワームは人語を
発し、天道 カブトの背後に立っていた。

「…なに？」

カブトは知らぬ間に背後に立っていたワームに驚き、振り返った。

『…なに？、じゃないよ天道きゅん、お前はもう 死ぬんだ！』

右腕を失った緑色のワームは左腕を振り上げて、その指先をパチリ
と鳴らした。

『変身…』

それは今までのワームとは全く違う姿をしていた。

「…お前は… 誰だ？」

カブトは驚きながらそのワームと距離をとり、両腕を構えた。

『……あ……？！俺か？』

そのワームは蜂の尾のような形状の右腕で自らを指差した。

『……ワームと他の化け物との雑種だから（モザイクワーム）ってところか……まあ、どうでもいいだろ天道きゅん』

そのワームは蜻蛉テントボの尾の形狀をしている左腕でカブトを指差した。

『お前は今すぐ……死ぬんだからさあ……』

そのワームは両腕を構えてカブトに向かつて走り出した。

「……速い……？」

天道はその速さに対応できなかつた。

『碎け散れ！』

次の瞬間、高速で機動するワームの一撃が、カブトの背中に炸裂した。

episode 3 (後書き)

加賀美は、危機を迎えたカブト・天道総司がどうなつていいくかが心配であった。

(…まあ、今も生きているんだから…どうにかピンチも切り抜けるんだろうな……)

むしろ加賀美は、他のことが気になっていた。

(…それにしても……)

また変な奴^{「ホーム」だけど}が現れたなあ……)

加賀美のぼやきをよそに、天道の話は続く。

episode 4
(前書き)

天道の戦い。

episode 4

「つー？」

カブトは背中に強烈な一撃を放たれて吹き飛び、トンネルの壁にめり込んだ。

『くくくっ天道きゅん 弱いよッ！』

モザイクワームが蜻蛉の尾のような形状の左手をカブトに向けると、その先端に銃口のような穴が開いた。

『俺はいつもの天道語録が聞きたいよッ？！』

地団太を踏みながら、壁にめり込んだカブトを挑発するモザイクワーム。

モザイクワームはヒステリックな声でカブト 天道を挑発しながら左手から光弾を発射した。

「うー！ぐー！ プット・オン！」

「プット・オン！」

天道が叫ぶと、機械音が響き、カブトの背中に先の装甲が装着され、

迫る無数の光弾を弾いた。

『あららー？ 酷いな天道きゅん』

光弾を弾かれたモザイクワームは首を傾げて左腕を下ろし、光弾の発射を止め 先端を人間のような腕に変質させた。

『早く死んじゃえば 早くスプラッシュ ターが始まるのにそれあ
ーー』

モザイクワームはわけの分からないことを叫びながら蜂の尾状の右手を構えて壁から這い出るカブトに迫った

『ワームステイング！』

モザイクワームは右手の先端に蜂の毒針のような突起を発生させ、体勢を立て直したカブトに向かつて鉄拳を繰り返した。

『キャストオフ！』

『キャストオフ！』

カブトは背中の装甲を排除し、迫り来るモザイクワームに銀色に輝く装甲を直撃させた。

『痛くも…痒くもないわヴォケヌヌイ！』

しかし、そんな攻撃に耐え、モザイクワームは再び鉄拳を繰り出した。

「ぐつー！クロック・アップー！」

カブトはベルトの左腰の部分にあるボタンを押しクロックアップを試みた。

クロックアップとは、ワームやカブトなどのライダーが発動することができる超超光速移動のことである。

「クロック・アップー！」

機械音が響いた時、既にカブトは凄まじい速さで動作を行っていた。モザイクワームの鉄拳が宙を切った。

『やるなあ……天道きゅんーー』

以下の戦いは地面に落下した兩粒が弾けて四散する間の出来事である

モザイクワームはカブトとほぼ同じタイミングでクロックアップし、超光速移動を行っていた。

『…キャブトゼクターの力には負けないよッ！』

必殺の鉄拳を避けられたモザイクワームは左腕の先端を人間の拳のような形状に変質させ、背後に迫っていたカブトに鉄拳を繰り出した。

「クロックアップか！」

カブトの拳はモザイクワームの拳に受け止められ、次に繰り出した蹴りもモザイクワームの蹴りに相殺されてしまった。

(くつ じこつ…今までのワームとは…全く違う…)

カブトの鉄拳と、モザイクワームの鉄拳が再びぶつかり合い、激しい火花を散らしながら空中で止まっている雨粒を蒸発させた。

「へいっ！」

衝撃を相殺しきれなかつたカブトは吹き飛ばされ、雨が空中で止まつてゐるトンネルの外へと落とした。

「……」

受け身もとれずに落下し、水浸しになるカブト。

次の瞬間、カブトとモザイクワームのクロックアップが解除された。

雨粒は四散し、カブトとモザイクワームは通常の速さの移動を始めた

『さあ……終わりだよカブトきゅん……』

カブトを追撃しようとしたモザイクワームに衝撃が襲いかかる。

『ぐつ……』

モザイクワームの背中には…カブトの専用バイク カブトエクステンダーが突っ込んでおり、その先端の角が直撃していた。

『……あああっ……な……ぜ……だ……』

カブトエクステンダーは、角でモザイクワームの腹を串刺しにして、そのまま壁へと叩きつけた。

「……お前の 終わりだ……！」

カブトはすかさず立ち上がり、カブトゼクターの上部ボタンを押して走り出した。

「ワン・ツー・スリー！！」

機械音が響き、カブトは跳躍した。

「ライダー キック！」

『……！』

カブトは跳躍したまま一気に迫り、カブトエクステンダーに串刺しにされたモザイクワームにライダー キックの凄まじい一撃を繰り出した。

episode 4 (後書き)

(……なんかやつぱり天道の自慢話かあ……)

……しかし……自慢話をこんなテンションで話すか う~む……?)

珍しく（失礼）加賀美の洞察力が冴えていた瞬間であった。

episode 5 (前書き)

episode 5

大地の霸道を極めし、燐然たる男。

「ライダー・キック！」

カブト専用バイクであるカブトエクステンダーに腹を突き破られ、壁に叩きつけられたモザイクワーム。

『なにッ？！』

そのモザイクワームに、跳躍したカブトの烈火の如き蹴りが炸裂した。

『うがあああああつ！天道 きゅん！痛い！痛いじゃないかアああツ！！』

ライダー・キックはモザイクワームの腹を抉る、しかしモザイクワームは皮膚を一気に硬質化させて、その衝撃を緩和させた。

『なにッ？！』

天道は最強の一撃を加えても絶命しないモザイクワームの生命力に驚いた。

「…ライダー・キックが…効かない…？」

カブトはなおも蠢くモザイクワームとの距離をとり、握りしめた拳を構えた。

『いや！効いたよ天道きゅん……があああッ……もつ駄目かもなあ……キレる…キレちゃうよ天道きゅん！』

モザイクワームは断末魔のような悲鳴をあげながら両腕を振り上げ、腹に突貫しているカブトエクステンダーを殴打した。

（へへ……やるなら…今しかない…）

カブトは再びカブトゼクター上部の三つのボタンを押し、跳躍した。

「ワン・ツー・スリー！」

カブトゼクターから機械音が響き、カブトの足裏に粒子が収束した。

カブトは跳躍したままモザイクワームに向かって加速し、再びライダー・キックを繰り出した。

「ライダー… キック！…」

疾風の如き一撃、しかしその蹴りはモザイクワームが体から表出させた鋭い2つの刃によって防がれてしまった。

『くかアアアツ！ダブルカリバー！』

モザイクワームは体から出現した刀…ダブルカリバーを両腕で握り、カブトに向かつて振り下ろした。

「ぐつ？！！」

クワガタの牙の如き刃はカブトの胸に深い刀傷を負わせて吹き飛ばし、向かいの湿った壁にめり込ませた。

『あがああっ！死ねおんどうりやあッ！！』

錯乱したモザイクワームは寄生を発しながら一本のダブルカリバーを振り回し、突き刺さつたまま加速するカブトエクステンダーを膝蹴りで吹き飛ばした。

(…カブトエクステンダーを…？！)

『…天井きゅん…天井きゅん…！…！』

動きを止めるカブトエクステンダー。

モザイクワームは両腕に握りしめたダブルカリバーを連結させ、壁にめり込んだカブトを睨みつけた。

『地獄にイ 落ちろオオオオオオオイツ！』

モザイクワームは重なった刃を、壁にめり込んだカブトに向かって思い切り投げつけた。

狂氣の刃が、壁にめり込み身動きのとれないカブトに迫る…

その時であつた…

「…くつ…？！？」

烈火の如き閃光がダブルカリバーを撃ち落とす。

次の瞬間、トンネル内に真紅のバイクが凄まじい速さで突入してきました。

「そこまでだ！！」

男は真紅のバイクから降りてヘルメットを外し、モザイクワームを指差して叫んだ。

「…お前は？！」

「シャンバイザー！」

驚く天道をよそに、その男は謎のバイザーを手元に出現させ、自らの顔に装着した。

「燐然！…」

男が燐然シャンゼンと叫ぶと、シャンバイザーが光り輝き、その体を包み込んだ。

「…なんなんだ…」いつは

天道は光の中から現れた戦士を見つめた、そこにいたのは半透明の装甲に身を包んだ戦士。

超光戦士シャンゼリオンであった。

「… わあ ーー いっちょやつてやるが！」

episode 5 (後書き)

(……何だかまた変なのが出て来たなあ……

ごめんなさい加賀美、作者より。

.....)

episode 6 (前書き)

燐然たるカブト。

episode 6

説明しようつ

超光戦士シャンゼリオントは……

異次元からの敵・ダークザイドから地球を守るために涼村暁が燐然シャンゼンした姿である。

因みに、ライダーでは無い。

「無理だ！クロックアップできるワームを倒せるのは クロックアップできるライダーだけだ！」

壁から這い出て制止するカブト、既に体は満身創痍であつた
当たり前ではあるが 天道は謎の戦士の登場に戸惑つていたのだ。

「そんな簡単に決めないでくれよッ、大体、あんただつて倒せてないじゃん」

シャンゼリオンは手元にブレードを出現させ、モザイクワームに切りかかった。

『ぐつ…こいつ…強いっ？！』

モザイクワームの繰り出す鉄拳を紙一重で避け、シャンゼリオンはブレードで応戦した。

「…なんだと…？」

シャンゼリオン 涼村に核心を突かれ、天道の眉間に（見えないくらい小さな）しづが寄った。

分かりやすく言つと、挑発されて闘志に火がついたのである。

『いのギラギラ野郎！！邪魔をするなあッ！』

散々一人に無視されているモザイクワームの怒りの鉄拳がシャンゼリオンにクリーンヒットし、煌めく装甲に身を包んだ戦士は勢いよ

く吹き飛んだ。

「ぬわあつ？！」

シャンゼリオンが壁に衝突したと思われた瞬間、その体は再び立ち上がったカブトによつて受け止められた。

「誰だか分からないうが 面白い奴だな」

「なんだかキザな奴だなあ まあ、いいやこの際！」

シャンゼリオンとカブトは裏拳で拳と拳を激しくぶつけた。

「さあ パッパッとやつちまおつぜー！」

「…天の道と 大地の道は交わらない…だが…今 この時だけは…
！」

お互いの拳から激しく散る火花、それは共闘する意志の証である。

『ぎいつー！ギラギラ野郎も天道きゅんもまとめて地獄送りにして…
死体は焼き肉にしてやるよアー！』

腹に開いた風穴を塞ぎ、モザイクワームは唸り声をあげながら、再びクロックアップを発動させた。

「させるか・クロックアップ！」

カブトはベルトの右部分を押し、再びクロックアップを発動させた。

「ハイパースピードディスク！」

シャンゼリオンは新たなる装備、ハイパースピードディスクを胸に装填し、クロックアップと同じ超超高速移動を開始した。

以後の戦闘は、一秒間よりも更に更に短い時間内に行われた戦闘である

「……フン！ ハアッ！ タアッ！ ……」

『……ぐつ……！ なんだ……！？ 天道きゅんの動きが今までとは……違うッ？！』

カブトの振るうカブトクナイガンの刃が連續してモザイクワームに

炸裂する。

腹に、顔に、胸に、天の一撃が乱舞する。

「でえええいッ！」

隙のできたモザイクワームの背中にシャンゼリオンのブレードが突き刺さり、緑色の血が噴出した。

『ぐがあッ？！』

「… でいやあッ！」

シャンゼリオンはブレードでモザイクワームの体をなぎ払い、同時に蹴りを加えることによって深い刀傷を負わせた。

『… ぐつ がああッ！まだあつ！俺の… お（奥の手）を使う！』

モザイクワームの体は既に満身創痍であり、所々から緑色の血が噴出していた。

「フンツー！」

「ヤアツツー！」

カブトとシャンゼリオンは壁を蹴つて三角飛びをすると、同時にモザイクワームに蹴りを見舞つた。

『 スーパークロックアップ！』

カブトとシャンゼリオンのダブルキックは避けられた。

『くかかかかツ！！ 愛してるぜえツ！天道きゅゅゅゅゅゅん！…！』

モザイクワームはクロックアップ中にも関わらず、更なる高速移動スーパークロックアップを発動させたのである。

「くつ…更に高速移動をしたのか ！」

周囲を見渡すカブトの肩を叩くシャンゼリオン。

彼は敵を倒すために、究極の力を発動させようとしていた。

『 大丈夫だ！俺の力も使え！ ファイナルクラッシュ！』

シャンゼリオンはその胸部から自らを象つた超エネルギーを放出し、

カブトに直撃させた。

「このフォームは？！」

カブトはシャンゼリオンのエネルギーを吸収し、その姿を次第に変化させていった。

その進化した姿は…後のカブトのハイパー・フォームに酷似していた

「…まあいい…すぐ終わらせる ハイパー クロックアップ！…」

「ハイパークロックアップ！」

カブトが走り出すと、機械音が響き、その体から放熱板が解放された。

「やつちまえー！」

ハイパー・フォームのカブトは一気にシャンゼリオンの視界から消え
…その高速の世界からも知覚されなくなつた。

『ぐつ……天道きゅん？！……ビゴだああッ！？』

そして、燐然たる光を纏つたカブトはスーパークロックアップを発動させたモザイクワームにも知覚されなかつた。

「マキシマム・ライダーパワー！」

カブトゼクターから低い機械音が響く、もう誰にも止められない。彼が世界の中心であつた。

「…………！」

カブトはカブトゼクター上部の3つのボタンを押した、再び低い機械音が響く。

「ワン・ツー・スリー！」

カブトは跳躍した、まるで鳳凰のように。

だが、粒子を纏つたその美しい姿を見れるものはいなかつた。

「……ライダー……キック……！」

天道の声が響く、それと同時に右足裏にカブトの紋章が浮かび上がる。

力が満ち溢れる。

究極たる力を収束させた渾身の一撃が、カブトの視界では既に停止しているに等しいモザイクワームに炸裂した。

『……？！』

断末魔を口にすりこもなく、モザイクワームは煌めく粒子と化し、それと同時にカブトのハイパークロックアップが解除された。

「……ちよっと俺達って キマリすぎだぜッ！」

シャンゼリオンはぐるりと身を翻して指を鳴らした。

十年たつても、涼村はいい意味で涼村であった。

……決して大量殺人犯のライダーになつたことなどない はず。

「……」

カブトはただ……天を指差していた……

e p i s o d e 6 (後書き)

(……ハイパークロックアップってなんだ…？…カブトにはまだ未知の力があるのか？）

シャンゼリオンって結局なんなんだ?……

ヒーロー

「……あいつ……ダークザイドとの混種だつたのかなあ……？」

シャンゼリオンは既に変身を解除し、涼村 晓は赤きバイクに跨つていた。

「……ダークザイド……？」

既にワームに擬態されていた男は走つて逃げていたらしく、既にトンネル内にはいなかつた。

あれほど激しい戦闘が展開していたのだから、当たり前ではあるが。

「お前 正義のヒーローなのに知らないのか？奴らダークザイドはワームと同じで人間に変化できる人間の敵だぜ」

涼村は瞳を細めて天道を見つめた。

「俺はもう十年近く戦ってるんだけど…やっぱり全滅せんのは難しいぜ」

その瞳には、幾つもの戦いを越えてきた戦士の炎が燃えていた。

「……そうか…だが…今の人類の敵は…ワームだ」

天道は言い放つと、涼村は笑いながらバイクのエンジンを起動させ。

「別にあてにはしてないぜ！まあ、身内がいるとしたら氣をつけな！ダークザイドは、人間に化けるんだからさー！」

涼村を乗せた赤きバイクは走り出した。

「あばよッ！」

トンネル内には、天道と壊れた事故車だけが残っていた…

「…身内…か…」

天道は妹である樹花の笑顔を思い出し、転倒していたカブトエクス
テンダーを起こした。

「…………」

天道は通常形態に戻ったカブトに跨り、その場を去つていった。

天道の話は、そこで終わった。

「……俺が最近すぐに駆けつけられないのは……樹花やひよりの身に降
りかかる危険が増えたからだ……」

表情を曇らせる天道、珍しい事態に加賀美は驚いていた。
空気が重い。

「まつ まあワームは俺が倒すから大丈夫だぜ！天道！パパつとや
つちまうぜー！」

加賀美は天道の肩を叩いて歩き出した、その背を見つめて天道は曰
を細めて呟いた。

「…単純な奴め……」

天道はため息を漏らしながら加賀美に背を向けて歩き出した。

雨はあがつたらじしく、曇り空を裂くように太陽が地上を光で照らし
ていた。

「…………」

彼はこれからも戦つ、全てをかけて。

どんな強敵が相手でも、どんな悲劇が待ち受けようとも。

我々はその伝説の目撃者である。

最強の伝説を見逃すな、ついてこれるなら…

Hプローグ（後書き）

これにて私のカブト小説は終了です。
皆様、ご愛読ありがとうございました。

カブトの本編の最終回後にもう一つ作りたいですはい…

皆さんありがとうございました。

「はあ…… はあ…… はあ」

ガヤガヤとショ・ミーンや、行き交う車が五月蠅い街中を、自転車を漕いでいる青年がいた

茶色いセーターを着て、赤いマフラーを首に巻いていた青年が漕ぐ自転車は歩道のアスファルトを走る。

「……やばい…… そのままじゃ遅れちゃう……」

青年は腕時計を見つめると、焦りを露わにして自転車を漕ぐ足に力を入れた。だが

「うわッ?!」

時計を見るために行つた片手運転によつて姿勢が崩れた自転車は歩道を飛び出し、大量の車が行き交う交差点へと飛び出した

「うわあああああッ!!」

「

けたたましいトラックのドクラクションとブレーキが叫びをあげ、青年の悲鳴をかき消す。

交差点へと投げ出された青年に向かつて、一気に大型バスが突っ込んでいく

が

「 わああああ…あいてツ！！」

交差点へと突っ込んでいった自転車は、何故か電柱へと思い切り衝突し、青年は九死に一生を得た。

因みに、急ブレーキを踏んだトラックも、元通りに交差点を曲がりきっていた

「クロック・オーバー」

カブトゼクターが機械音を鳴らす、と同時に仮面ライダー・カブトの変身を解除した天道。

天道は電柱衝突した青年の背後に立ち、微笑んだ。

「ふつ
面白い奴だ」

顔面から流血しながらも立ち上がる青年の背後から、真っ白いハンカチを投げる天道。

「あつ」

青年は背後から飛んできたハンカチを手に取ると、間抜けな声を出して振り返った。

「……」れ 誰のなんだろ

持ち主を探すためにキヨロキヨロと周囲を見回し、白いハンカチを大切にポケットに入れながら、青年は呟く。
しかし、周囲には流血している自分に引いている人々しかいなかつた

「……あつー！ 遅刻しちゃう！」

その青年 良太郎は大切な用事を思い出したらしく、ボロボロになつた自転車を転がしながら走り出した。

天道から良太郎へ

カブトから電王へ

新たなる伝説が今、躍動を始めた。

作者「カブトの最終回のラストのちよつと前と電王を繋ぐ時間軸といつことで創作してみました。

平成仮面ライダーは様々な理由で集合することが無いようなのでこんな妄想をしてしまいました（涙）

平成仮面ライダーが全員集合する小説が読みたいなあ……」

良太郎「……あの……なに独り言をぶつぶつ言っているんですか」

モモタロス「そこには見るな」

作者「なんやで（怒り）貴様ら許せくんでーいくぞー！俺のイメージン！！！」

テラワロス「俺！惨状！」

天道「おばあちゃんが言つていた……オチをつけない作者は最低だ
と」

作者「ごめんなさい」

テラワロス「ごめんなさい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8274a/>

MASKED RIDER KABUTO episode X

2010年10月9日10時50分発行